

【 重聯禱 】

司祭) われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い  
我等皆 靈 を全 うして曰わん、我等の 思 を全 うして曰わん、



司祭) しゅぜんのうしや わ れつそ かみ なんぢ いの き い あわれ  
主 全 能 者、吾が列祖の神よ、爾 に禱る 聆き納れて 憐 めよ、



司祭) かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ  
神よ、爾 の 大 なる 憐 に因りて我等を 憐 めよ、爾 に禱る、 聆き納れて 憐 めよ、



司祭) またわ くに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの  
又我が國の天皇及び國を 司 る者の爲に禱る、



司祭) またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう およ お  
又 教 會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主 教 セラフィム、及びハリストスに於

ことごと われら けいてい ため いの  
ける 悉 くの我等の兄弟の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ。

司祭) またわれら けいてい しょしさい しょしゅうどうしさい およ お われら しゅうけいてい  
又 我等の兄弟、諸司祭、諸 修 道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆 兄弟の  
ため いの  
爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ。

司祭) またつね きおく ふく しせい せいきょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしゃ およ  
又 恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正 教の総主 教、この聖堂の建 立 者、及  
すで ねむ ことごと ふそけいてい こ ところ しょほう ほうむ せいきょう もの ため  
び已に寝りし 悉 くの父祖兄弟、此の 處と諸 方とに 葬られたる正 教の者の爲に  
いの  
禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ。

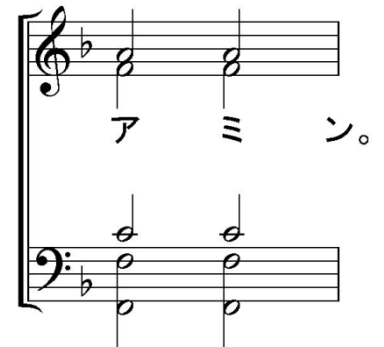
司祭) またこ しそん せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ ここ  
又此の至尊なる聖堂に物を 獻 り、善 業を行 い、之に勞し、之に歌い、及び此  
た なんぢ おおい ゆたか あわれみ あお のぞ もの ため いの  
に立ちて爾の大にして豊 なる 憐 を仰ぎ望む者の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ。

( ※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。 )

司祭) ( 黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに因りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ爾の民に遣し給え、 )

司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



### 【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、



司祭) 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、



司祭) <sup>ぎ ふくいんけい かれら ひら</sup>義の福音經を彼等に啓かん、



司祭) <sup>かれら そのせい こう しと きょうかい いつ</sup>彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、



司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも</sup>神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、



司祭) <sup>けいもうしゃ なんぢら こうべ しゅ かが</sup>啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、



司祭) ( 黙誦：主我が神、高きに居り卑きを臨み、爾の獨生子・神・我が主イイススハリ

ストスを遣して人間の救となしし者よ、爾の僕・啓蒙者・其首を爾

に屈めし者を顧み、時に随いて、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、不朽

の衣を賜い、彼等を爾が聖・公・使徒の教會に一にし、彼等を爾の選

ばれたる群に合せ給え、 )

司祭) 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何時

も世に、



## 【 信者の聯禱1 】

司祭) 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信

者復又安和にして主に禱らん、



司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐れみ護れよ、



司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

司祭) ( 黙誦：<sup>しゅ ばんぐん かみ なんぢ われら いま なんぢ せい さいだん まえ た なんぢ</sup> 主、萬軍の神や、爾が我等に、今も爾の聖なる祭壇の前に立ち、爾  
<sup>じれん ふふく われら つみ しゅうじん あやまち ため きとう ゆる たま</sup> の慈憐に俯伏し、我等の罪と衆人の過との爲に祈禱するを赦し給いしを  
<sup>なんぢ かんしゃ かみ われら いのり い われら なんぢ しゅうじん ため なんぢ</sup> 爾に感謝す、神よ、我等の禱を納れ、我等を爾が衆人の爲に、爾に  
<sup>いのり ねがい むけつ まつり けん た もの たま われら なんぢ せいしん</sup> 祈と願と無血の祭とを獻ずるに勝うる者となし給え、我等爾が聖神の  
<sup>ちから こ なんぢ ほうじ ため た もの ていざい つまづき そのりょうしん</sup> 力にて此の爾の奉事の爲に立てし者を、定罪なく、躓なく、其良心の  
<sup>いさぎよ しょう もつ いづれ ときいづれ ところ なんぢ よ かな もの なんぢ</sup> 潔き證を以て、何の時何の處にも爾を籲ぶに適う者となして、爾  
<sup>われら き なんぢ あいれん おお よ われら ため じんじ もの いた</sup> 我等に聴き、爾が哀憐の多きに依りて、我等の爲に仁慈の者となるを致せ  
、 )

司祭) <sup>けだしおよ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup> 蓋凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



## 【 信者の聯禱2 】

司祭) <sup>われら またまたあんわ しゅ いの</sup> 我等復又安和にして主に禱らん、



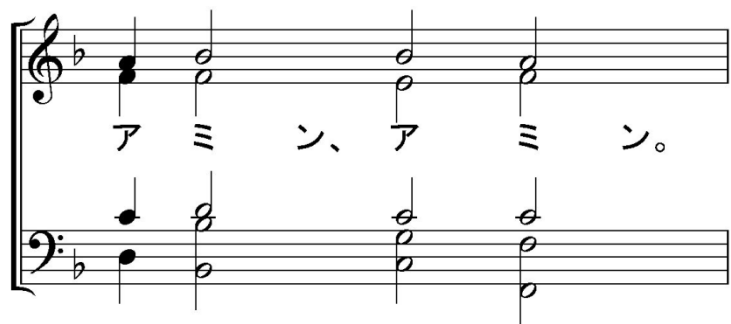
司祭) <sup>かみ なんぢ おんちょう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) <sup>えいち</sup>  
睿智、

司祭) ( 黙誦: <sup>ぜん ひと あい しゅ われらまたかつしばしばなんぢ ふふく なんぢ いの われら</sup>  
の 禱を顧みて、我等の 霊と體とを凡そ肉體と靈神との穢より 潔  
<sup>われら きず ていざい なんぢ せい さいだん まえ た たま かみ</sup>  
くし、我等に、玷なく、定罪なく、爾の聖なる祭壇の前に立つを賜え、神  
<sup>われら とも きとう もの いのち しん ぞくしん ちしき しんぼ あた たま</sup>  
や、我等と偕に祈禱する者にも、生命と信と屬神の智識との進歩を與え給え、  
<sup>かれら つね おそれ あい もつ なんぢ つと きず ていざい なんぢ せいき</sup>  
彼等が常に 畏と愛とを以て 爾に務めて、玷なく、定罪なく、爾の聖機  
<sup>みつ う なんぢ てんごく い た もの え たま</sup>  
密を領け、爾の天國に入るに勝うる者となるを得せしめ給え、 )

司祭) <sup>われらつね なんぢ けんぺい もと まも こうえい なんぢちち こ せいしん けん ため</sup>  
我等常に 爾が權柄の下に護られて、光榮を 爾父と子と聖神に獻ずるが爲なり、  
<sup>いま いつ よよ</sup>  
今も何時も世に、



【 ヘルヴィムの歌 】



われら っし んで ヘルヴィ ムに のっ  
我 等 慎 し んで ヘルヴィ ムに の則



り ヘルヴィ ムに の っ  
り ヘルヴィ ムに の 則 っ  
り



せ い さん の う た を い の ち を ほ 施 ど  
聖 い 三 んの 歌 た を 生 の 命 を 施 ど



こ す の せ い さん しゃ に た て ま っ り  
こ す の 聖 い 三 者 に た 献 て ま っ り

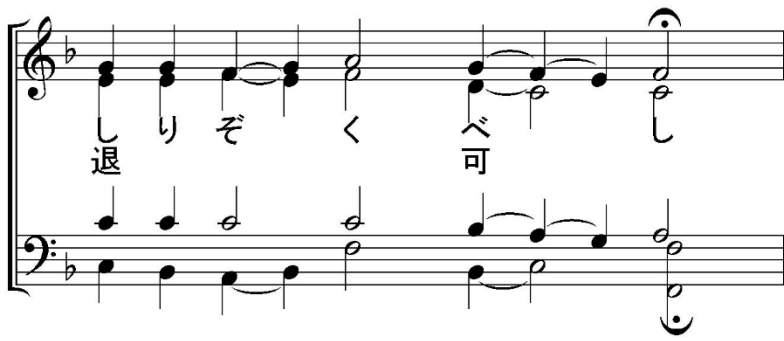


て



こ の よ の っ と め を し り ぞ く べ 可 し  
こ の 世 の 勤 と め を し 退 り ぞ く べ 可 し





司祭) ( 黙誦: 肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光榮の王に來り、或は近  
 づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋爾に奉事するは、天軍の爲にも大に  
 して畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本性  
 を易えず失わずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主宰なる  
 に縁りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋主我が神や、爾  
 は獨天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィムの主、  
 イズライリの王、獨聖にして聖者の中に息う者なり、故に我爾獨善にし  
 て善く納るる者に禱る、我罪ありて堪えざる爾の僕を顧み、我が靈と心  
 とを邪なる思慮より淨め、我神品の恩寵を被れる者を、爾が聖神の  
 力に藉りて、此の爾の聖なる食案の前に立ち、爾が至淨なる聖體至尊  
 なる聖血の機密を行ふに堪うる者となし給え、蓋我首を屈めて爾に就き、  
 爾に禱る、爾の顔を我より避くる勿れ、我を爾が僕衆の中より却  
 くる勿れ、乃我罪有りて當らざる爾の僕に此の祭物を獻ぐるを致させ給  
 え、蓋ハリストス我が神よ、爾は獻ずる者と獻ぜらるる者、受くる者と頒たる  
 者なり、我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す  
 爾の神とに獻ず、今も何時も世に、 )

司祭) ( 黙誦: 我等奧密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、  
 今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬  
 有の王を戴かんとするに縁る、ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya。

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた  
 我等奧密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

おう いただ よ  
の王を 戴 かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ。

こ　よ　おもんばかり　ことごと　しりぞ　べ　てんし　ぐん　み　にな　たてまつ　ばんゆう  
此の世の　慮　を　悉　く　退　く可し、天使の軍の見えずして荷い　奉　る萬有の

おう いただ  
王を 戴 かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ。 )

司祭) ねがわ しゅ かみ そのくに おい わ く に てんのうおよ く に つかさど もの つね きおく  
願 くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を 司 る者を恒に記憶せん、

ねがわ　しゅ　かみ　そのくに　おい　きょうかい　つかさど　そんき　われら　ぜんにほん　ふしゅきょう  
願　くは主・神は其國に於て、　教　會を　司　る尊貴なる我等の全日本の府主　教

ねがわ しゅ かみ そのくに おい すで ねむ ふしゅきょう ふしゅきょう ふ  
願 くは主・神は其國に於て、已に寢りし府主教セルギイ、府主教イリネイ、府

しゅきょう                      ふしゅきょう                      ふしゅきょう                      だいしゅきょう                      しゅ  
主 教 ウラディミル、府主 教 フェオドシイ、府主 教 ダニイル、大主 教 ニコライ、主

きょう しゅきょう およ こと きおく われら すで ねむ かぞく  
教 ニコライ、主 教 ペトル、( 及び殊に記憶せらるる 某 ) 我等の已に寝りし家族、

ねがわ　しゅ　かみ　そのくに　おい　なんぢしゅうせいきょう　ら　つね　きおく  
願　くは主・神は其國に於て、爾　衆　正　教のハリスティアニン等を恒に記憶せん、

いま　いつ　よよ  
今も何時も世世に、

A musical score for the song "Ame no Natsu no Yoru ni" (雨の夏の夜に). The score is written for voice and piano. The voice part is in the treble clef, and the piano accompaniment is in the bass clef. The key signature is one flat (B-flat), and the time signature is 4/4. The lyrics are written below the voice staff: アー ミ ン。

か 神  
み の な み い る つか い は み え ず して に な いた て ま  
並 居 使 見 担 獻



司祭) ( 黙誦: <sup>とうと</sup>尊 <sup>なんぢ</sup>きイオシフは <sup>いさぎよ</sup>爾 <sup>み</sup>の <sup>き</sup>潔 <sup>おろ</sup>き身を木より下し、<sup>きよ</sup>淨 <sup>ぬの</sup>き布に裹み、<sup>こうりょう</sup>香 <sup>おお</sup>料にて覆

<sup>あらた</sup>い、<sup>はか</sup>新 <sup>おさ</sup>なる墓に藏めり、

ハリストスよ、<sup>なんぢ</sup>爾 <sup>かみ</sup>は神なるにより、<sup>からだ</sup>體 <sup>はか</sup>にて墓に在り、<sup>あ</sup>靈 <sup>たましい</sup>にて地獄に在り、<sup>ぢごく</sup> <sup>あ</sup>

<sup>うとう</sup>右盜と偕に<sup>とも</sup>天堂に在り、<sup>てんどう</sup>父と<sup>あ</sup>聖 <sup>ちち</sup>神と共に<sup>せいしん</sup>寶座に在り、<sup>とも</sup>限 <sup>ほうざ</sup>なき者として一切<sup>あ</sup> <sup>かぎり</sup> <sup>もの</sup> <sup>いつさい</sup>

<sup>み</sup>を満て<sup>たま</sup>給えり、

ハリストスよ、我が<sup>わ</sup>復活の<sup>ふかつ</sup>泉 <sup>いづみ</sup>たる <sup>なんぢ</sup>爾 <sup>はか</sup>の墓は、<sup>いのち</sup>生命を <sup>ほどこ</sup>施 <sup>もの</sup>す者、<sup>ちどう</sup>地堂より <sup>うるわ</sup>美

<sup>もの</sup>しき者、<sup>じつ</sup>実に如何なる<sup>いか</sup>王の<sup>おう</sup>宮よりも <sup>みや</sup>耀 <sup>かがや</sup>ける者と <sup>もの</sup>顯 <sup>あらわ</sup>れたり、

<sup>とうと</sup>尊 <sup>なんぢ</sup>きイオシフは <sup>いさぎよ</sup>爾 <sup>み</sup>の <sup>き</sup>潔 <sup>おろ</sup>き身を木より下し、<sup>きよ</sup>淨 <sup>ぬの</sup>き布に裹み、<sup>こうりょう</sup>香 <sup>おお</sup>料にて

<sup>おお</sup>覆い、<sup>あらた</sup>新 <sup>はか</sup>なる墓に藏めり、

<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>なんぢ</sup>爾 <sup>めぐみ</sup>の恵に因りて<sup>おん</sup>恩を<sup>た</sup>シオンに垂れ、<sup>じょうえん</sup>イエルサリムの <sup>た</sup>城 <sup>たま</sup>垣を建て給

<sup>そのとき</sup>え、<sup>なんぢぎ</sup>其時に <sup>まつり</sup>爾義の祭、<sup>ささげもの</sup>獻物と <sup>やきまつり</sup>燔祭を <sup>よろこ</sup>喜び饗けん、<sup>そのとき</sup>其時に <sup>ひとびと</sup>人人 <sup>なんぢ</sup>爾

<sup>さいだん</sup>の祭壇に <sup>こうし</sup>犢 <sup>そな</sup>を奠えんとす、 )

【 増聯禱 】

司祭) われらしゅ まえ わ いのり ま くわ  
我等主の前に吾が 禱 を増し加えん、



司祭) ささ とうと さいひん ため しゅ いの  
獻げたる 尊 き祭品の爲に主に禱らん、



司祭) こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの  
此の聖堂、及び信と 愼 と神を畏るる 心 とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まめか ため しゅ いの  
我等 諸 の憂愁と忿怒と危 難とを 免 るるが爲に主に禱らん、



司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾 の恩 寵 を以て、我等を佑け救い 憐 み護れよ、



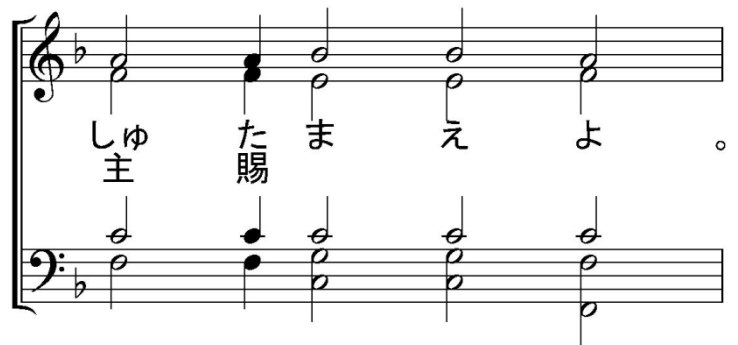
司祭) こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと  
此の日の 純 全・成 聖・平 安・無 罪ならんことを主に求む、



司祭) へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと  
平 安の天使、正 しき 教 導 師、吾が 靈 體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと  
我等の 罪と 過 とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと  
我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平 安を賜わんことを主に求む、



司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと  
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ  
我等の生命の終がハリストニアニに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ  
リストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、

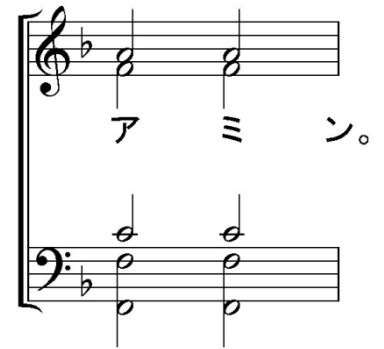
しよせいじん きおく われら おのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等

いのち もつ の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ( 黙誦：主・神・全能者、獨聖にして心を盡して爾を籲ぶ者より讚美の祭を  
 う受くる者よ、我等罪人の禱をも受けて爾の聖なる祭壇に携え、我等を、  
 わが罪と衆人の過との爲に、爾に獻物と屬神の祭とを獻ずるに勝  
 うる者となし給え、我等に爾の前に恩寵を得せしめて、我等の祭は爾に  
 よく納れらる者となり、爾が恩寵の善神は臨みて、我等の中と此の供えら  
 れたる祭品と爾の衆人と共に居るを致させ給え、 )

司祭) 爾の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神と  
 ともあがほ  
 偕に崇め讃めらる、今も何時も世に、



【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信經 】

司祭) 衆人に平安、



司祭) 我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんが爲なり、







司祭) ( 黙誦: <sup>しゅわれ ちから われなんぢ あい</sup>主 我の 力よ、我 爾を愛せん、<sup>しゅ われ かため われ かくれが</sup>主は我の防固、我の避所なり、<sup>しゅわれ ちから</sup>主 我の 力

<sup>われなんぢ あい</sup>よ、我 爾を愛せん、<sup>しゅ われ かため われ かくれが</sup>主は我の防固、我の避所なり、<sup>しゅわれ ちから われなんぢ</sup>主 我の 力よ、我 爾を

<sup>あい</sup>愛せん、<sup>しゅ われ かため われ かくれが</sup>主は我の防固、我の避所なり、 )

司祭) <sup>もんもん つつし き</sup>門、門、 敬みて聴くべし、

われしんず、ひとつのかみちちぜんのうしゃ、てん  
我 信 一 神 父 全 能 者 天

とち、みゆるとみえざるばんぶつをつくりし  
地 見 見 萬 物 造

しゅを、またしんず、ひとつのしゅイイスハリストス  
主 又 信 一 主

かみのどくせいの子、よろづよのさきに  
神 獨 生 子 萬 世 前

ちちより生まれ、ひかりよりのひかり、まこと  
父 生 光 光 眞

とのかみよりのまことのかみ、生まれし  
神 眞 神 生

ものにてつくられしにあらず、ちちといっ  
者 造 非 父 一

たいにしてばんぶつかれにつくられ、われ  
體 萬 物 彼 造 我



ら ひ と び と の た め 、 ま た わ れ ら の す く い の た 爲  
 等 人 人 の 爲 又 我 等 の 救 い の 爲  
 め に てんよ り く だ り 、 せ い しん お よ び ど う て 貞  
 天 降 聖 神 及 童 貞  
 い ぢょ マ リ ヤ よ り み を と り ひ と と な り 、 わ 我  
 女 身 取 人  
 れ ら の た め に ポン テ イ ピ ラ ト の と き じゅう じ か に  
 等 の 爲 に 時 十 字  
 く ぎ う た れ 、 く る し み を う け ほ う む ら  
 釘 苦 受 葬  
 れ 、 だ い さ ん じ つ に せ い し ょ に か な い て ふ く  
 第 三 日 聖 書 應 ない て 復  
 か つ し 、 てん に の ぼ り 、 ち ち の み ぎ に ざ 坐  
 活 天 升 父 右  
 し こ う え い を あ ら わ し て い け る も の と し せ  
 光 榮 を 顯 生 る 者 と 死  
 し も の と を し ん ぱ ん す る た め に ま た き た り 、  
 者 を 審 判 の 爲 に 還 来  
 そ の く に お わ り な か ら ん を 、 ま た し ん ず 、 せ 聖  
 其 國 お 終  
 い し ん し ゅ い の ち を ほ ど こ す も の ち ち よ り い 出  
 神 主 生 の 命 を 施 者 の 父  
 で 、 ち ち お よ び こ と と も に お が ま れ ほ め ら  
 父 及 子 と 共 お 拜 讃

れ、よげんしゃを もってか つて い い しを、また  
預 言 者 以 嘗 言 又  
しんず、ひ と つ の せ い な る お お や け な る し と の  
信 一 聖 公 使 徒  
きょう か い を、わ れ み と む、ひ と つ の せん れ  
教 會 我 認 一 洗 禮  
い、もって つ み の ゆ る し を う る を、わ れ の 望  
以 罪 赦 得 我 の 望  
ぞ む し しゃ の ふ く か つ、な ら び に ら い せ い  
死 者 復 活 並 來 世  
の い の ち を、ア ミ ン。  
生 命

【 アナフォラ 】

司祭) <sup>ただ</sup>正しく立ち、<sup>た</sup>畏れて立ち、<sup>おそ</sup>敬みて<sup>た</sup>安和にして<sup>つつし</sup>聖なる<sup>あんわ</sup>獻物を<sup>せい</sup>奉らん、<sup>ささげもの</sup>  
<sup>たてまつ</sup>

へ い わ の あ わ れ み さ 讃 ん よ う の ま つ り  
平 和 憐 れ み 讃 ん よ う の ま つ り

を

司祭) <sup>ねがわ</sup>願くは我が主<sup>わ</sup>イイススハリストスの<sup>しゅ</sup>恩、<sup>めぐみ</sup>神父の<sup>かみちち</sup>慈、<sup>いつくしみ</sup>聖神の<sup>せいしん</sup>親は、<sup>したしみ</sup>爾衆<sup>なんぢしゅう</sup>  
<sup>じん</sup>人と<sup>とも</sup>偕に<sup>あ</sup>在らんことを、



司祭) <sup>こころうえ むか</sup> 心 上に向 うべし、



司祭) <sup>しゅ かんしゃ</sup> 主に感 謝すべし、



司祭) ( 黙誦: <sup>なんぢ かしょう なんぢ さんよう なんぢ さんび なんぢ かんしゃ なんぢ いつさい</sup> 爾 を歌 頌 し、 爾 を讃 揚 し、 爾 を讃 美 し、 爾 に感 謝 し、 爾 が一切

<sup>おさ ところ おい なんぢ ふ おが とうぜん ぎ けだしなんぢ なんぢ どくせい</sup> 治むる 處 に於て 爾 に伏し拜むは當 然にして義なり、 蓋 爾 と 爾 の獨 生

し なんぢ せいしん は、い がた し がた み べ はか べ なが あ  
 子と 爾 の聖 神は、言い難く、知り難く、見る可からず、測る可からず、永く在  
 り、恒に變らざる神なり、爾 は我等を無より有となし、陥 りし者を復 起し、  
 およ われら てん のぼ なんぢ らいせい くに たま いた ばんじ おこな  
 及び我等を天に升らしめて、爾 が來世の國を賜うに至るまで萬事を 行 い  
 や これら ため およ われら し ところ し ところ あらわ ところ あらわ  
 て止めず、此等の爲に、凡そ我等が知る 所、知らざる 所、顯 れし 所、顯  
 れざりし 所 の我等に賜わりし諸 恩の爲に、我等 爾 と 爾 の獨生子と 爾 の  
 せいしん かんしゃ またこ ほうじ ため なんぢ かんしゃ なんぢこれ われら て う  
 聖 神とに感謝す、又此の奉事の爲に 爾 に感謝す、爾 之を我等の手より領  
 くるを 甘 じ給えり、然れども千 千の天使首 及び萬 萬の天使、ヘルヴィム及  
 びセラフィム、六 翼の者、多目の者、高く翔る者、翼 を具うる者は 爾 の  
 まえ た  
 前に立ちて、 )

司祭) かちうた うた よ さけ い  
 凱 歌を歌い、籲び、叫びて曰う、

せ い せ い せ い な る か な しゅ サ ヴァ オ フ、 なん ぢ  
 聖 い 聖 い 聖 い 哉 主 爾

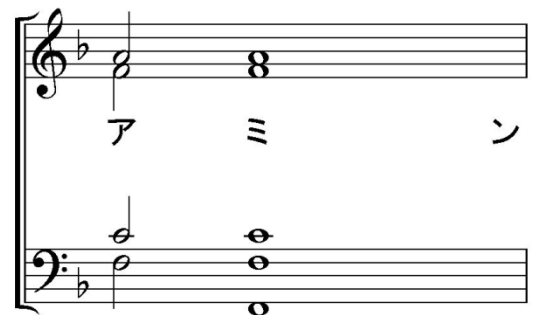
の こ う え い は て ん ち に み つ 、 い と た か き  
 光 榮 は 天 地 に 満 つ 、 至 と 高 か き

に オ サ ン ナ 、 しゅ の な に よ り て き た る も の  
 主 の 名 に 因 り 來 た る 者



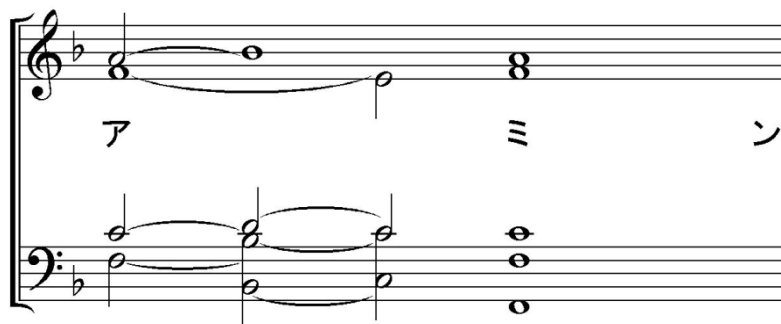
司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい われら こ ふく ぐん とも よ い せい かな しせい</sup>人を愛する主 宰よ、我等も此の福たる軍と偕に籲びて曰う、聖なる哉、至聖  
<sup>かな なんぢ なんぢ どくせいし なんぢ せいしん せい かな しせい かな なんぢ</sup>なる哉、爾と爾の獨生子と爾の聖神、聖なる哉、至聖なる哉、爾の  
<sup>こうえい いげん なんぢ なんぢ せかい あい なんぢ どくせいし たま いた</sup>光榮は威嚴なり、爾は爾の世界を愛して、爾の獨生子を賜うに至り、  
<sup>およ これ しん もの ちんりん まぬか えいせい え かれきた およ われら</sup>凡そ之を信ずる者に沈淪を免れて永生を得せしむ、彼來りて、凡そ我等  
<sup>お ていせい せいぜん わた よ ただ い みづか おのれ せかい いのち</sup>に於ける定制を成全し、付されし夜、正しく言えば親ら己を世界の生命の  
<sup>ため わた よ そのせい しじょうむてん て パン と かんしゃ しゅくさん</sup>爲に付しし夜、其聖にして至淨無玷なる手に餅を取り、感謝し、祝讃し、  
<sup>せいせい さ そのせい もんとおよ しと あた い</sup>成聖し、擘きて其聖なる門徒及び使徒に予えて曰えり、 )

司祭) <sup>と くら これわ たい なんぢら ため さ もの つみ ゆるし え いた</sup>取りて食え、是我が體、爾等の爲に擘かるる者、罪の赦を得るを致す、



司祭) ( 黙誦: <sup>おなじ ばんさん のち しゃく と いわ</sup>同く晩餐の後に 爵を執りて曰く、 )

司祭) <sup>みなこれ の これわれ しんやく ち なんぢらおよ おお ひと ため なが もの つみ ゆるし</sup>皆之を飲め、是我の新約の血、爾等及び衆くの人爲に流さるる者、罪の赦を  
<sup>え いた</sup>得るを致す、



司祭) ( 黙誦：故に我等此の 救を施す 誠、及び凡そ我等の爲に有りし事、即 十

じか はか だいさんじつ ふくかつ てん のぼ こと みぎ ざ こと こうえい さいど こうりん  
字架、墓、第三日の復活、天に升る事、右に坐する事、光榮なる再度の降臨

きおく  
を記憶して、 )

司祭) なんぢ たまもの なんぢ しょぼく しゅう ためいつさい ため なんぢ たてまつ  
爾の 賜を、爾の諸僕より、衆の爲一切の爲に爾に 獻りて、



司祭) ( 黙誦：我等復 爾に此の靈智なる無血の奉事を獻じて、願い祈り切に求む、爾の

せいしん われらおよ こ そな さいひん つかわ たま  
聖 神を我等及び此の奠えたる祭品に 遣し給え、 )

司祭) ( 黙誦：第三時に 爾の至聖神を 爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取  
あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた かみ いさぎよ  
り上ぐる事勿れ、尚我等 爾に祈る者の衷に之を 新にせよ、神よ、 潔

こころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま  
き 心を我に造り、正しき 霊を我の衷に 改め給え、

だいさんじ なんぢ せいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と  
第三時に 爾の至聖神を 爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取  
あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた われ なんぢ  
り上ぐる事勿れ、尚我等 爾に祈る者の衷に之を 新にせよ、我を 爾の

かんばせ お なか なんぢ せいしん われ と あ なか  
顔より逐う事勿れ、 爾の聖神を我より取り上ぐる事勿れ、

だいさんじ なんぢ せいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と  
第三時に 爾の至聖神を 爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取  
あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた  
り上ぐる事勿れ、尚我等 爾に祈る者の衷に之を 新にせよ、 )

司祭) こ へい もつ なんぢ そんたい な  
此の餅を将て、 爾のハリストスの尊體と成し、アミン。

こ しゃくちゅう もの もつ なんぢ そんけつ な  
此の爵 中の者を将て、 爾のハリストスの尊血と成し、アミン。

なんぢ せいしん もつ これ へんか  
爾の聖神を以て之を變化せよ、アミン。アミン。アミン。

( 黙誦：願くは此は領くる者の爲に、 霊の警醒となり、諸罪の赦となり、 爾

せいしん たいごう てんごく え なんぢ お ゆうかん しんあん  
が聖神の體合となり、天國を得ることとなり、 爾に於ける勇敢となり、審案

あるい ていざい  
或は定罪とならざらんことを、

また れいち ほうじ しん もつ ねむ げんそ れつそ たいそ よげんしゃ しと  
又この靈智なる奉事を、信を以て寝りし元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・

でんどうしゃ ふくいんしゃ ちめいしゃ ひょうしんしゃ せつせいしゃ およ およ しん もつ おわ  
傳道者・福音者・致命者・表信者・節制者、及び凡そ信を以て終り

ぎ たましい ため なんぢ けん  
し義なる 霊の爲に 爾に獻ず、 )

司祭) こと せいししけつ いた さんび われら こうえい ぢょさい しょうしんぢょ えいていどうぢょ  
特に至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マ

ため  
リヤの爲、

【 常に福 】 ※祭日に他の「生神女の歌」を歌う例あり  
ザダストイニク

つねにさいわいにしてまったくきずなき  
 常 福 全 瑕 ず な き

しゅうしんぢょ、わがかみのははなるなぢを  
 生 神 女 、 吾 が 神 の 母 は な る な 爾 ん ぢ を

さいわいなりととのうはまことにあた  
 福 い わ い な り と と 称 の う る は ま こ と に あ た

れり。

ヘルガムよりと尊うとく、セラフムにならびなくさ榮  
 ヘル ガ ム より と 尊 う と く 、 セ ラ フ ム に な ら び な く さ 榮

かえ、みさおをやぶらずしてかみこ言とば  
 か え 、 み さ お を や 壊 ぶ ら ず し て か み こ 言 と ば





司祭) ( 黙誦：聖預言者・前驅・授洗イオアン、光榮にして讃美たる聖使徒、及び爾が

諸聖人の爲に獻ず、神よ、彼等の祈禱に因りて我等を顧み、並に凡そ

永生の復活の望を懷きて寝りし者を記憶して、彼等を爾が顔の光

の照す所に安息せしめ給え、

又爾に禱る、主よ、爾が眞實の言を正しく傳うる正教者の凡の

主教品、凡の司祭品、ハリストスに因る輔祭品、及び悉くの神品を記

憶せよ、

又此の靈智なる奉事を、全世界の爲、聖・公・使徒の教會の爲、潔淨

にして尊く生を度る者の爲、我が國の天皇及び國を司る者の爲に

爾に獻ず、主よ、彼等に泰平の國政を賜え、我等も彼等の平和により、凡

の敬虔と潔淨とを以て、恬静安然にして生を度らんが爲なり、)

司祭) 主よ、殊に教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィムを記憶し、

彼を平安・無難・尊貴・壮健・長壽なる者、及び爾が眞實の言を正しく傳う

る者として、爾の聖なる教會に與え給え、



司祭) ( 黙誦：主よ、我等が居る 所 の此の都邑と 凡 の都邑と地方、及び信を以て此の中に  
 居る者を記憶せよ、主よ、航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難  
 に遭う者、擄となりし者、及び彼等の救を記憶せよ、主よ、爾の諸聖堂  
 に物を献り、善業を行ふ者、及び貧者を記念する者を記憶し、及び  
 我等衆人に爾の憐れを垂れ給え、 )

司祭) 並びに我等に、口を一にし 心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至厳の名を讃榮  
 讃頌するを賜え、今も何時も世に、



司祭) 願くは 大なる神、我が救主 イススハリストスの 憐れは、爾衆人と偕に在ら  
 んことを、



# 【 増聯禱 】

司祭) 我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、



司祭) すで けん およ せい とうと さいひん ため しゅ いの  
已に獻ぜられ及び聖にせられし 尊き祭品の爲に主に禱らん、



司祭) ひと あい わ かみ これ そのせい てんじょう むけい さいだん お ぞくしん けいこう  
人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香とし

て享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、



司祭) われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの  
我等 諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い 憐み護れよ、



司祭) こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと  
此の日の 純 全、成 聖、平 安、無 罪ならんことを主に求む、



司祭) へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと  
平 安の天使、正 しき 教 導 師、吾が 靈 體の守護者を賜わんことを主に求む



司祭) われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと  
我等の 罪と 過 とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと  
我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平 安を賜わんことを主に求む、



司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと  
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ  
我等の生命の終がハリストニアニに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ  
リストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) しん どういつ せいしん たいごう もと われら おのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび  
信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并  
ことごと われら いのち もつ かみ いたく  
に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ( 黙誦：ひと あい しゅさい われら わ ことごと いのち のぞみ なんぢ ゆだ ねが  
人を愛する主宰よ、我等は我が悉くの生命と望とを爾に委ねて、願い

いの せつ もと われら きよ りょうしん もつ なんぢ てんじょう おそ きみつ  
 祈り切に求む、我等に、淨き良心を以て、爾が天上の畏るべき機密、  
 こ せい ぞくしん えん あづか たま こ つみ ゆるし あやまち なだめ  
 此の聖せられたる屬神の筵に與るを賜いて、此れが罪の赦、過の宥、  
 せいしん たいごう てんごく しぎょう なんぢ お ゆうかん しんあんあるい ていざい  
 聖神の體合、天國の嗣業、爾に於ける勇敢となりて、審案或は定罪  
 とならざるを致させ給え、 )

# 【 天主經 】

司祭) しゅさい われら いさみ もつ つみ え あえ なんぢてん かみちち よ い たま  
 主宰よ、我等に勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾天の神父を籲びて言うを賜え、



が に ち よ う の か て を こ ん に ち わ れ ら に あ た え た 給  
日 用 糧 今 日 我 等 與 え 給

ま え 、 わ れ ら に お い め あ る も の を わ 我  
我 等 債 者 の を 我

れ ら ゆ る す が ご と く 、 わ れ ら の お い  
赦 如 我 等 債

め を ゆ る し た ま え 、 わ れ ら を い ざ な い  
赦 給 我 等 誘

に み ち び か ず 、 な お わ れ ら を き ょ う あ  
導 猶 我 等 凶 惡

く よ り す く い た ま え 、  
救 給

司祭) けだしくに けんのう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋 國と權 能と光 榮は 爾 父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に、



司祭) <sup>しゅうじん へいあん</sup> 衆 人に平安、



司祭) <sup>なんぢら こうべ しゅ かが</sup> 爾 等の 首 を主に屈めよ、



司祭) ( <sup>み ベ おう そのほか がた のうりよく もつ ばんゆう かくてい そのじれん おお</sup> 黙誦：見る可からざる王、其 量り難き能 力を以て萬有を畫定し、其慈憐の多  
<sup>もつ ばんぶつ む ゆう しゅ われらなんぢ かんしゃ しゅさい なんぢみづか</sup> きを以て萬物を無より有となしし主よ、我等 爾に感謝す、主 宰よ、爾 親  
<sup>なんぢ こうべ かが もの てん かえり たま けだしけつにく かが あら</sup> ら 爾に 首を屈めし者を天より 顧み給え、蓋 血肉に屈めしに非ず、  
<sup>すなわちなんぢおそ かみ かが ゆえ しゅさい なんぢ ここ そな もの われ</sup> 乃 爾 畏るべき神に屈めり、故に主 宰よ、 爾は此に奠えたる者を、我  
<sup>らしゅうじん ぜん ため かくじん ひつよう おう ひとし わか こうかい もの とも</sup> 等 衆 人の善の爲に、各 人の必要に應じて 等く頒ち、航海する者と偕に  
<sup>こうかい りよう もの とも りよう れいたい いし やまい うれ もの</sup> 航海し、旅行する者と偕に旅行し、靈 體の醫師として、病を患うる者を  
<sup>いや たま</sup> 醫し給え、 )

司祭) <sup>なんぢ どくせいし おんちょう じれん じんあい よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち</sup> 爾 が獨生子の恩 寵と慈憐と仁 愛とに因りてなり、 爾は彼と至聖至善にして生命

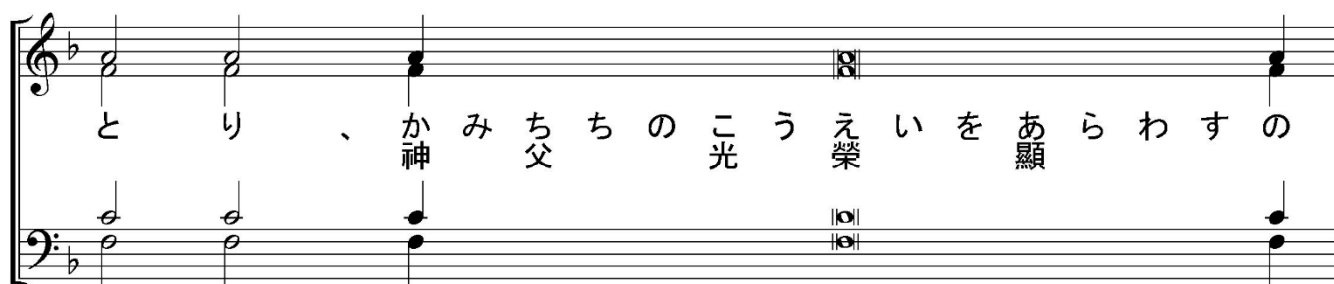


ほどこ なんぢ しん とも さんよう いま いつ よよ  
を 施 す 爾 の 神 と 偕 に 讃 揚 せ ら る、 今 も 何 時 も 世 世 に



司祭) ( 黙誦：主<sup>しゅ</sup> イイスス<sup>われら</sup> ハリストス<sup>かみ</sup> 我等<sup>なんぢ</sup> の 神<sup>せい</sup> よ、 爾<sup>すまい</sup> の 聖<sup>なんぢ</sup> な る 住 所 と 爾<sup>くに</sup> が 國<sup>こうえい</sup> の 光<sup>ほう</sup> 榮<sup>の</sup> の 寶<sup>の</sup>  
座<sup>ざ</sup> より 眷<sup>かえり</sup> み 給<sup>たま</sup> え、 上<sup>うへ</sup> に は 父<sup>ちち</sup> と 偕<sup>とも</sup> に 坐<sup>ざ</sup> し、 此<sup>ここ</sup> に は 見<sup>み</sup> え ず し て 我<sup>われら</sup> 等<sup>とも</sup> と 偕<sup>お</sup> に 居<sup>もの</sup> る 者<sup>の</sup> よ、  
來<sup>きた</sup> り て 我<sup>われら</sup> 等<sup>せい</sup> を 聖<sup>なんぢ</sup> に し、 爾<sup>けん</sup> の 權<sup>う</sup> 能<sup>て</sup> の 手<sup>もつ</sup> を 以<sup>なんぢ</sup> て、 爾<sup>しじょう</sup> が 至<sup>たい</sup> 淨<sup>し</sup> の 體<sup>そん</sup> と 至<sup>ち</sup> 尊<sup>の</sup> の 血<sup>ち</sup> と を  
我<sup>われら</sup> 等<sup>さづ</sup> に 授<sup>またわれら</sup> け、 又<sup>もつ</sup> 我<sup>しゅうじん</sup> 等<sup>さづ</sup> を 以<sup>たま</sup> て 衆<sup>た</sup> 人<sup>ま</sup> に 授<sup>た</sup> け 給<sup>ま</sup> え、 )

司祭) 謹<sup>つつし</sup> み て 聽<sup>き</sup> く べ し、 聖<sup>せい</sup> な る 物<sup>もの</sup> は 聖<sup>せい</sup> な る 人<sup>ひと</sup> に、



司祭) ( 黙誦：神<sup>かみ</sup> の 羔<sup>こひつじ</sup> は 割<sup>さ</sup> か れ 分<sup>わか</sup> た る、 彼<sup>かれ</sup> は 割<sup>さ</sup> か れ て 分<sup>ぶん</sup> 離<sup>り</sup> せ ず、 恒<sup>つね</sup> に 食<sup>くら</sup> わ れ て 永<sup>なが</sup> く 盡<sup>つ</sup> き ず、  
乃<sup>すなわち</sup> 領<sup>もの</sup> く る 者<sup>せい</sup> を 聖<sup>せい</sup> に す、 )

※<sup>レーゲント</sup>信徒領聖まで、聖歌指揮者の指示に従って歌うこと。

( 奉事規程が指定しているのは『主日領聖詞』、すなわち第148聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に2節以下を句としてアンティフォン形式で歌う。若しくは誦經する。

本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。日本正教会では通年「大パスハ領聖詞」を歌うことが多い。

日本正教会では神品領聖時に『主日領聖詞』に代えて、早課イルモス（其の週の調、又は生神女のカタワシヤ等）、スティヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。

歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。

)

## 【 領聖詞 第148 聖詠 】



句) そのことごと てんし かれ ほ あ そのことごと ぐん かれ ほ あ  
其 悉 くの天使よ、彼を讃め揚げよ、其 悉 くの軍よ、彼を讃め揚げよ。

句) ひ つき かれ ほ あ ことごと ひか ほし かれ ほ あ  
日と月よ、彼を讃め揚げよ、 悉 くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。

句) しょてん てん てん うえ みづ かれ ほ あ  
諸 天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。

句) しゅ な ほ あ けだしきれい すなわちな めい すなわちつく かれ  
主の名を讃め揚ぐべし、 蓋 彼言いたれば、 即 成り、命じたらば、 即 造られたり、彼  
これ た よよ いた のり あた これ こ  
は之を立てて世に至らしめ、則を與えて之を踰えざらしめん。

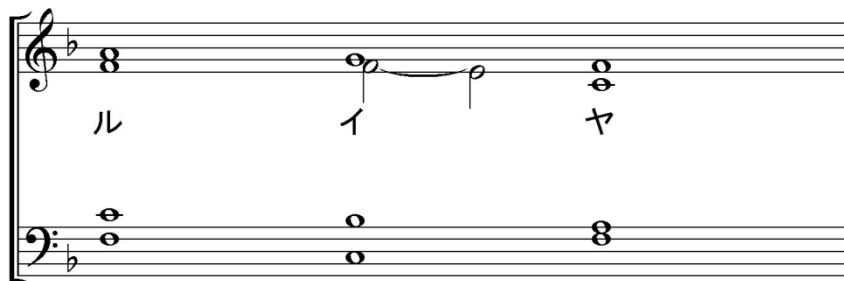
句) ち しゅ ほ あ おおうお ことごと ふち ひ あられ ゆき きり しゅ ことば したが ぼうふう  
地より主を讃め揚げよ、大 魚と 悉 くの淵、火と 霰、雪と霧、主の 言 に 従 う暴風、

やま ことごと おか くだもの き ことごと はくこうぼく やじゅう もろもろ かちく は もの と  
山と 悉 くの陵、 果 の樹と 悉 くの栢香木、野 獣と 諸 の家畜、匍う物と飛ぶ

とり ち しょう ばんみん ぼくはく ち しょううし しょうねん しょうぢょ おきな わらべ しゅ な ほ  
鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少 年と處女、翁と童は、主の名を讃

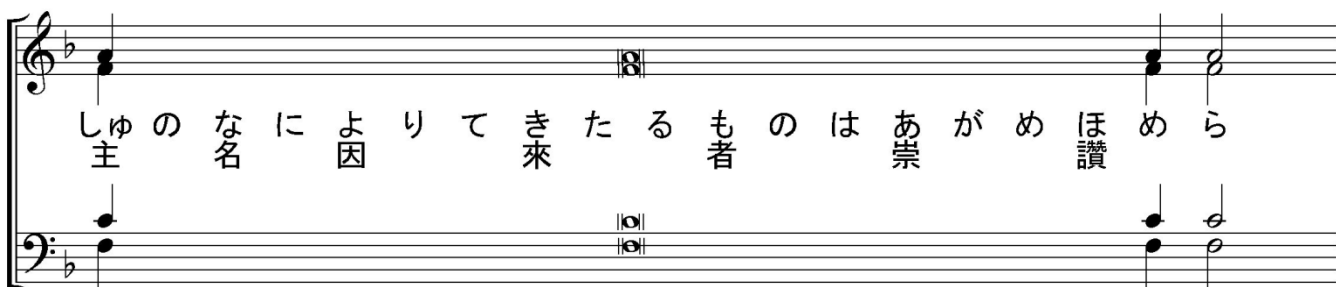
め揚ぐべし、 蓋 惟 其名は高く擧げられ、其 光 榮は天地に 徧 し。

句) かれ そのたみ つの たか そのしよせいじん しよし かれ した たみ さかえ たか  
彼は其 民の角を高くし、其 諸 聖 人、イスライリの諸子、彼に親しき民の 榮 を高く  
せり。



# 【 信徒領聖 】

司祭) <sup>かみ おそ こころ しん もつ ちか きた</sup> 神を畏るる 心 と 信とを以て近づき來れ、



全員) <sup>しゅ われしん か う みと なんぢ じつ せいかつ かみ こ ざいにん すく ため</sup> 主よ我信じ、且つ承け認めて、爾を實にハリストス生活の神の子、罪人を救うが爲

<sup>よ きた もの しゅうざいにん うちわれだいいち またしん こ すなわちなんぢ しじょう</sup> に世に來りし者となす、衆罪人の中我第一なり、又信ず、此れは乃爾が至淨

<sup>たい こ すなわちなんぢ しそん ち ゆえ なんぢ いの われ あわれ わ じゆう じゆう</sup> の體、此れは乃爾が至尊の血なりと、故に爾に祈る、我を憐み、我が自由と自由

<sup>ことば おこない し し おか しょざい ゆる たま ならび われ</sup> ならずして、言と行にて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給え、並に我に

<sup>ていざい なんぢ しじょう きみつ う つみ ゆるし えいせい え いた たま</sup> 定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るを致させ給え、ア

ミン。

<sup>かみ こ いまわれ なんぢ きみつ えん あづか もの い たま けだしわれなんぢ あだ きみつ</sup> 神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機密

つ げざらん、また なんぢ 爾 にイウダの如き 接 吻 を爲さざらん、 乃 すなわち うとう ごと なんぢ う みと  
 めて 曰う、 主よ、 なんぢ くに おい われ きおく しゅ いの なんぢ せい きみつ う  
 るは、 わ ため しんあんあるい ていざい れいたい いやし  
 我が爲に 審 案 或 は 定 罪 とならず、すなわち 靈 體 の 醫 とならんことを、

【 (大パスハ) 領聖詞 】

※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。



司祭) ( 黙誦：ハリストスの復活を見て、聖なる主イイス・獨 罪なき者を拜むべし、ハリ  
 ストスよ、我等 爾 の 十字架を拜み、爾 の聖なる復活を歌い讃む、爾 は我  
 ら かみ なんぢ ほかた かみ し ただなんぢ な と な しんじゃ みな  
 等の神なればなり、 爾 の外他の神を知らず、唯 爾 の名を稱う、信者よ、皆  
 きた せい ふくかつ おが じゅうじか よろこび ぜんせかい のぞ  
 来りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、 十字架にて 喜 は全世界に臨  
 めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其 復活を崇め歌わん、主は 十字架に釘  
 うたるるをしの しの し もつ し ほろぼ  
 うたるるを忍びて、死を以て死を 亡 ししによる、  
 あらた ひか ひか しゅ こうえいなんぢ かがや  
 新 なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光 榮 爾 に 輝 けばなり、シオン  
 いまいわ たのし なんぢ いさぎよ しょうしんぢよ なんぢ う しゅ ふくかつ  
 よ、今 祝いて 樂 めよ、 爾 も 潔 き 生 神 女よ、 爾 が生みし主の復活を  
 よろこ たま  
 歡 び給え、  
 ああおい しせい ああちえ かみ ことば ちから  
 嗚呼 大 にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の 言 と能力よ、  
 なんぢ くに く ひ おい われら なおしたし なんぢ う たま  
 爾 が國の暮れざる日に於て、我等に猶 親 く 爾 を領けさせ給え

しゅ なんぢ しそん ち もつ なんぢ しよせいじん きとう よ ここ きおく  
 主よ、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せ  
 られし者の諸罪を滌い給え、  
 ひと あい しゅさい わ たましい おんしゅ われら こ ひ おい なんぢ てん  
 人を愛する主宰、我が霊の恩主よ、我等に、此の日に於ても、爾が天  
 じょう ふし きみつ う たま なんぢ かんしゃ われら みち なお われら  
 上の不死の機密を領けさせ給いしを爾に感謝す、我等の途を直くし、我等  
 しゅうじん なんぢ おそ おそ けんご われら いのち まも われら あゆみ かた  
 衆人を爾を畏るるの畏れに堅固にし、我等の生命を護り、我等の歩を固  
 たま こうえい しょうしんぢょ えいていどうぢょ およ なんぢ しよせいじん いのり  
 め給え、光榮なる生神女・永貞童女マリヤ及び爾が諸聖人の祈と  
 ねがい よ  
 願とに因りてなり、 )

※ 全員が元の位置に戻って歌う準備ができてから「アリルイヤ」を歌う。



司祭) かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ  
 神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ、

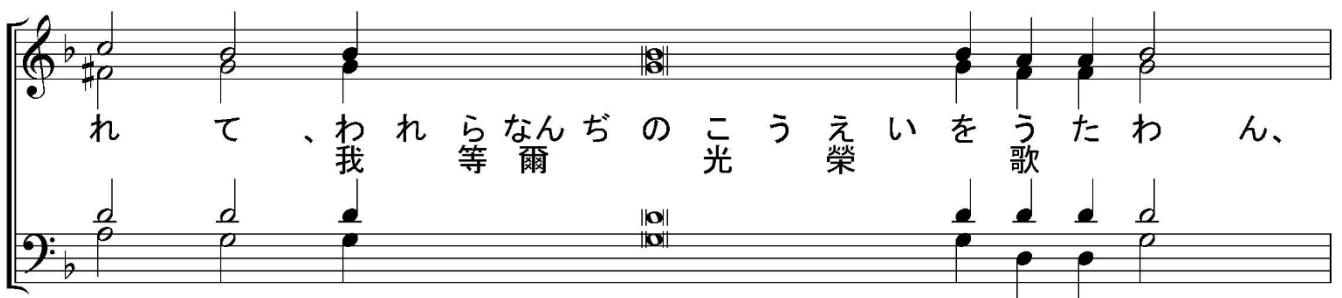
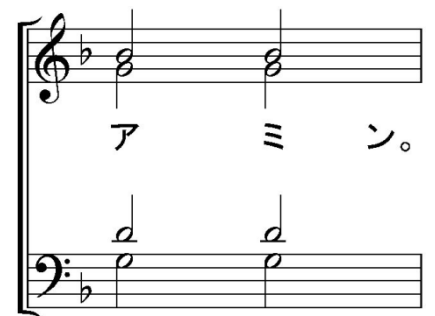




司祭) ( 黙誦：神よ、願くは爾は諸天の上に挙げられ、爾の光榮は全地を蔽わん、我

等の神は恒に崇め讃めらる、 )

司祭) いま いつ よよ、  
今も何時も世に、



なんぢわれらに、しんせいにしてふしなるい生  
爾我等神聖不死なるい生

のちをほどこすなんぢのせいきみつを  
命を施す爾の聖機密をつを

うくるをゆるせばなり、いのるわれらを  
領くるをゆるせばなり、祈のる我等を

なんぢのせいせいにもり、しゅうじつなんぢ  
爾の成聖にもり、終日爾

のぎをならわしめたまえ、  
義を習わしめたまえ、

ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ  
A R L U Y A A R L U Y A A R L U Y A

司祭) つつし た しんせい しじょう ふし いのち ほどこ てんじょう おそ せい  
謹みて立て、神聖・至浄・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖



きみつ う よろ しゅ かんしゃ  
機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、



司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救い憐み護れよ、

司祭) こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい もと われらおのれ みおよ たがい おのおの  
此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に各

の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) けだしなんぢ われら せいせい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ  
蓋爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世

に、



司祭) へいあん い  
平安にして出づべし、

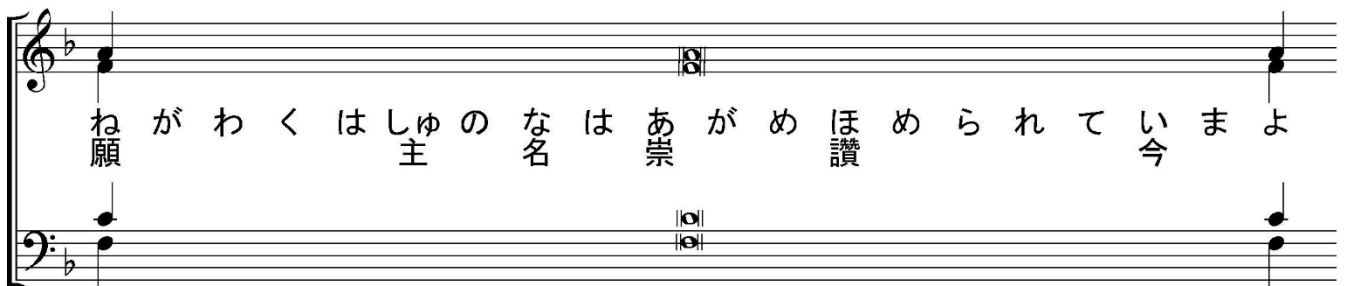
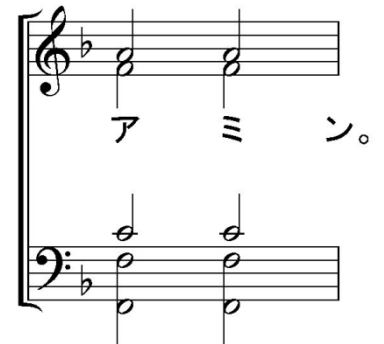


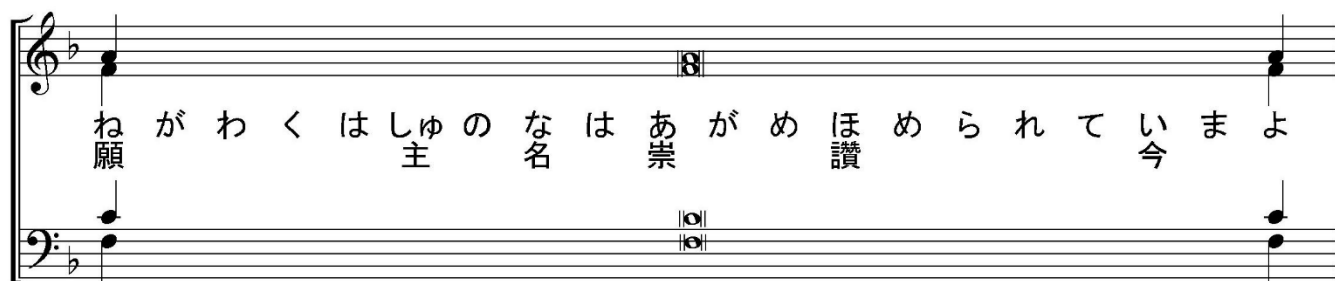
司祭) しゅ いの  
主に禱らん、





なんぢ さんよう もの ふく くだ およ なんぢ たの もの せい しゅ なんぢ たみ すく  
 司祭) 爾を讃揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主よ、爾の民を救い、  
 およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい じゅうまん まも なんぢ どう び あい  
 及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛す  
 もの せい なんぢ しんせい ちから もつ かれら こうえい およ われらなんぢ たの もの のこ  
 る者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む者を遺  
 なか なんぢ せかい なんぢ しょきょうかい しょしさい わ くに てんのうおよ くに つかさど もの  
 す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を司る者  
 およ なんぢ しゅうじん へいあん たま けだしおよそ ぜん ほどこし およそ ぜんび たまもの うえ  
 及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる賜は、上  
 なんぢこうめい ちち くだ われらこうえい かんしゃ ふくはい なんぢちち こ せいしん けん  
 より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拜を爾父と子と聖神に獻  
 ず、いま いつ よよ  
 ず、今も何時も世に、





誦經) われいづ とき しゅ ほ あ かれ ほ つね わ くち あ わ たましい しゅ もつ  
 我 何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が 靈 は主を以  
 ほこ おんじゅう もの き たの われ とも しゅ とうと とも かれ な あが ほ  
 て誇らん、温 柔 なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を 尊 め、偕に彼の名を崇め讃  
 めん。われかつ しゅ たづ かれ われ き い わ すべ あやう われ まぬか  
 我 嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての 危 きより我を 免 れしめ  
 たま め あ かれ あお もの てら かれら おもて はぢ う こ まづ  
 給えり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の 面 は愧を受けざらん。此の貧しき  
 ものよ しゅ き い これ そのことごと かんなん すく しゅ つかい しゅ おそ  
 者呼びしに、主は聆き納れて、之を其 悉 くの艱 難より救えり。主の 使 は主を畏る  
 もの めぐ まも かれら たす あぢわ しゅ いか じんじ み かれ たの ひと  
 る者を環り衛りて、彼等を援く。味 えよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃む人は  
 さいわい およ しゅ せいじん しゅ おそ けだしかれ おそ もの とぼ わか  
 福 なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋 彼を畏るる者は乏しきことなし。少き  
 しし とぼ う ただしゅ たづ もの なん こうふく か  
 獅子は乏しくして餓え、唯 主を尋ぬる者は何の幸 福にも缺くるなし。

司祭) ( 黙誦： みづか ほうりつ しょよげんしゃ じょうまん ちち ていせい ことごと じょうまん  
 親 ら法律と諸預言者との 成 満にして、父の定制を 悉 く 成 満せし  
 わ かみ つね われら こころ よろこび たのしみ じょうまん たま  
 ハリストス我が神よ、常に我等の 心 を 喜 と 樂 とに 成 満せしめ給え、  
 いま いつ よよ  
 今も何時も世世に、 )

司祭) ねがわ しゅ こうふく そのおんちよう じんあい よ つね なんぢら あ いま いつ よよ  
 願 くは主の降 福は、其 恩 寵 と仁 愛とに因りて常に 爾 等に在らん、今も何時も世世

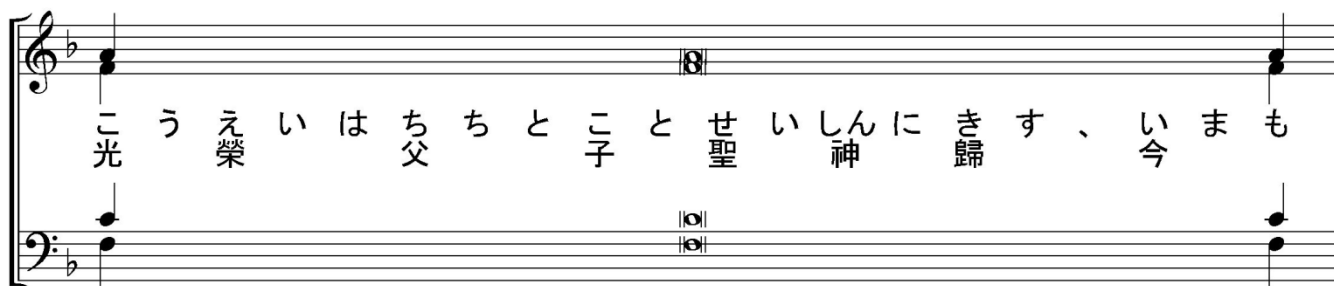
に、



※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP47【永眠者の爲の<sup>リテイヤ</sup>熱衷祈祷】に飛ぶ。

【 通常の終結 】

司祭) ハリストス神我等の<sup>かみわれら たのみ</sup>侍よ、光榮は爾に<sup>こうえい なんぢ き</sup>歸す、光榮は爾に<sup>こうえい なんぢ き</sup>歸す、



司祭) し ふくかつ われら まこと かみ そのしじょう はは こうえい さんび せい  
死より復活せしハリストス我等の眞の神は、其至淨なる母、光榮にして讃美たる聖

しと われら せいしんが だいしゅきょうせいきんこう こくしょうほうしん  
使徒、我等の聖神父コンスタンチノーポリスの大主教聖金ロイオアン、克肖捧神な

わがしよしんが にほん あしとだいしゅきょうせい せい ぎ かみ そふぽ  
る我諸神父、( 某 ) 日本の亞使徒大主教聖ニコライ、聖にして義なる神の祖父母イ

オアキム<sup>およ</sup>及び<sup>およ</sup>アンナ、及び<sup>しよせいじん</sup>諸<sup>きとう</sup>聖<sup>より</sup>人の<sup>われら</sup>祈<sup>あわれ</sup>禱<sup>すく</sup>に<sup>かれ</sup>因<sup>ぜん</sup>て<sup>ひと</sup>我等<sup>を</sup>を<sup>を</sup>憐<sup>を</sup>み<sup>を</sup>救<sup>を</sup>わ<sup>を</sup>ん、<sup>を</sup>彼<sup>を</sup>は<sup>を</sup>善<sup>を</sup>に<sup>を</sup>して<sup>を</sup>人

を<sup>あい</sup>愛<sup>しゆ</sup>する<sup>を</sup>主<sup>を</sup>な<sup>を</sup>れ<sup>を</sup>ば<sup>を</sup>なり、



【 萬壽詞 】





( 祈祷終了、十字架接吻 )

【 いくとせ  
幾歳も 】

い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く

と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も

い 幾 く と 歳 せ も

【 永眠者の爲の熱衷祈禱 <sup>リテイヤ</sup> 】

ひ と を あ い す る き ゅ う せ い し ゅ よ し せ し ぎ じん  
人 と を 愛 い す る 救 世 い し 主 よ し 死 せ し 義 人

の た ま し い と と も に な ん ぢ が ぼ く ひ の た ま  
の 霊 た し い と と 借 も に な ん ぢ が 僕 く ひ の 霊 ま

し い を や す ん ぜ し め て か れ ら を な ん ぢ に あ 在  
し い を 安 す ん ぜ し め て か 彼 れ 等 を な ん ぢ に あ 在

る ふ く ら く の い の ち に ま も り た ま  
る ふ 福 く ら 楽 の い 生 の ち 命 に ま 護 も り た 給 ま

え  
え

し ゅ よ な ん ぢ が し ゅ せ い じん の あ ん そ く す る と こ ろ  
し 主 よ な ん ぢ が し 諸 聖 い 人 の あ 安 そ く す る と 處

に なん ぢ が ぼ く ひ の た ま し い を や す ン ぜ し め た 給  
爾 僕 婢 の 靈 ま し い を 安

ま え なん ぢ ひ と り ひ と を あ い す る し ゅ な れ ば  
爾 獨 人 と を 愛 し 主

な り

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き 歸 す  
光 榮 い は ち 父 と 子 と 聖 い し ん に き 歸 す

なん ぢ は ぢ ご く に く だ り て つ な が れ し も の の く 鎖  
爾 地 獄 に く 降 だ り て つ な が れ し も の の く 鎖

さ り を と き た る か み な り み づ か ら なん ぢ  
と 釋 か 神 な り み 親 づ か ら 爾



が ぼ く ひ の た ま し い を や す ン ぜ し め た ま

え

い ま も い つ も よ よ に ア ミ ン

ひ と り い さ ぎ よ く き ず な き ど う て い ぢ ゃ た ね な

く し て か み を う み し も の よ か れ ら の た ま

し い の す く わ れ ん こ と を い の り た ま え

【 重聯禱 】

司祭) <sup>かみ</sup>神よ、<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>おお</sup>大なる<sup>あわれみ</sup>憐に<sup>より</sup>因て我等を<sup>われら</sup>憐めよ、<sup>あわれ</sup>爾に<sup>なんぢ</sup>禱る、<sup>いの</sup>聆き<sup>き</sup>納れて<sup>い</sup>憐めよ、<sup>あわれ</sup>



司祭) <sup>またねむ</sup>又<sup>かみ</sup>寝りし<sup>ぼくひ</sup>神の<sup>あんそく</sup>僕婢(某)の<sup>ため</sup>安息の<sup>およ</sup>爲、<sup>かれら</sup>及び<sup>およ</sup>彼等に<sup>じゆう</sup>凡そ<sup>じゆう</sup>自由と<sup>つみ</sup>自由ならざる<sup>ゆる</sup>罪の<sup>ため</sup>赦されんが<sup>いの</sup>爲に<sup>い</sup>禱る、



司祭) <sup>しゅかみ</sup>主<sup>かれら</sup>神が<sup>たましい</sup>彼等の<sup>しよぎじん</sup>靈を<sup>あんそく</sup>諸義人の<sup>ところ</sup>安息する<sup>い</sup>處に<sup>たま</sup>入れ<sup>いの</sup>給わんことを<sup>い</sup>禱る、



司祭) <sup>かれら</sup>彼等に<sup>かみ</sup>神の<sup>あわれみ</sup>憐と<sup>てんこく</sup>天國と<sup>しよざい</sup>諸罪の<sup>ゆるし</sup>赦とを<sup>たま</sup>賜わんことを、<sup>わがし</sup>ハリストス<sup>おうおよ</sup>我死せざる<sup>かみ</sup>王及<sup>ねが</sup>び<sup>い</sup>神に<sup>い</sup>願う、



司祭) <sup>しゅ</sup>主に<sup>いの</sup>禱らん、



司祭) もろもろ れいしん もろもろ にくたい かみ し ほろ あくま むなし なんぢ せかい いのち  
諸 の霊神と 諸 の肉體との神、死を亡ぼし悪魔を 虚くし、 爾の世界に生命を

たま しゅ なんぢみづか ねむ なんぢ ぼくひ たましい ひか ところ しげ くさば へい  
賜いし主よ、 爾 親ら寝りし 爾の僕婢 ( 某 ) の 霊 を光る 處、 茂き草場、 平

あん ところ やまい かなしみ なげき とお ところ あんそく ぜん ひと あい かみ  
安の 處、 病 と 悲 と 歎 との遠ざかる 處 に安息せしめ、 善にして人を愛する神な

より かれら あるい ことば あるい おこない あるい おもい おか ことごと つみ ゆる たま  
るに因て彼等が 或 は 言、 或 は 行、 或 は 思 にて犯しし 悉 くの罪を赦し給

けだしひとひとり い つみ おこな もの ただなんぢ つみ なんぢ ぎ えいえん ぎ  
え。 蓋 人 一 も生きて罪を 行 わざる者なし、 唯 爾 は罪なし、 爾の義は永遠の義、

なんぢ ことば しんじつ けだし われら かみ なんぢ ねむ なんぢ ぼくひ  
爾の 言 は眞實なり。 蓋 ハリストス我等の神よ、 爾 は寝りし 爾の僕婢 ( 某 )

ふくかつ いのち あんそく われらこうえい なんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん いのち  
の復活と生命と安息なり。我等光榮を 爾 と 爾の無原の父と至聖至善にして生命を

ほどこ なんぢ しん けん いま いつ よよ  
施す 爾の神とに獻ず、 今も何時も世に、



# 【 永眠者の爲のコンダク 】



を しよ せ い じ ん と と も に や ま い  
諸 聖 人 偕 疾 ま い

も か な し み も な げ き も な く た だ お 終  
悲 歎 唯 終

わ り な き い の ち の あ る と こ ろ に や す ん  
生 命 の 處 に 安 すん

ぜ し め た ま え  
給

司祭) <sup>かみわれら たのみ</sup> ハリストス神我等の 恃よ、<sup>こうえい なんぢ き</sup> 光榮は爾に歸す、<sup>こうえい なんぢ き</sup> 光榮は爾に歸す、

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 い は 父 子 と 聖 神 に 歸 す 、 今 も

い つ も よ よ に ア ミ ン し ゅ あ わ れ め し ゅ あ わ れ  
何 時 世 世 に ア ミ ン 主 憐 れ 主 憐 れ



司祭) <sup>し ふくかつ い もの し もの そのぜんのう て たも たま われら まこと</sup>  
死より復活し、生ける者と死せし者を其全能の手に保ち給うハリストス我等の眞の

<sup>かみ そのしじょう はは こうえい さんび せいしと こくしょうほうしん わがしよしんぶ</sup>  
神は、其至淨なる母、光榮にして讚美たる聖使徒、克肖捧神なる我諸神父、

( 某 ) <sup>にほん あしとだいしゅきょうせい せい ぎ かみ そふぼ およ</sup>  
日本の亞使徒大主教聖ニコライ、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及び

<sup>およ しよせいじん きとう より ねむ ぼくひ たましい しよぎじん すまい い</sup>  
アンナ、及び諸聖人の祈禱に因て、寝りし僕婢( 某 )の靈を諸義人の住所に入れ、

<sup>ふところ やす しよぎじん れつ くわ およ われら あわれ すく かれ ぜん</sup>  
アブラアムの懷に安んぜしめ、諸義人の列に加え、及び我等を憐み救わん、彼は善

<sup>ひと あい しゅ</sup>  
にして人を愛する主なればなり、



司祭) <sup>しゅ なんぢ ぼくひ さいわい ねむり えいえん あんそく あた かれら えいえん き</sup>  
主よ、爾の僕婢( 某 )の福なる寢に永遠の安息を與え、彼等に永遠の記

<sup>おく な たま</sup>  
憶を爲し給え、



ばんじゅし  
【 萬壽詞 】

か み よ わ が く に の てん の 皇 う お よ び  
神 我 國 天 皇

く に を つ か さ ど る も の  
國

わ れ ら の ふ しゅきょ う セ ラ フィ ム、 お よ び こ と ご と  
我 等 府 主 教

く の せ い きょ う の ハリスティアニンら を い く と せ  
正 教

に も ま も り た ま え  
護 給

( 祈祷終了、十字架接吻 )

りようせいかんしゃしゅくぶん  
【 領 聖 感 謝 祝 文 】

かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き  
神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す、神や光榮は爾に歸す、

【 第一祝文 】 しゅわ かみ なんぢわれざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか もの  
と致させ給うを爾に感謝す、我堪えざる者に爾が至淨なる天の賜を受くるを容し  
たま なんぢ かんしゃ しゅさい ひと あい しゅ われら ため し ふくかつ われ たましい からだ  
給うを爾に感謝す、主宰・人を愛する主、我等の爲に死して復活し、我が靈と體  
おん あた これ せい ため われら こ おそ べ いのち ほどこ きみつ たま もの  
とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を施す機密を賜いし者  
もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき がい か われ ころ め あきら  
や、求む此の機密は、我にも靈と體とを癒し、凡の敵の害を驅り、我が心の目を明  
われ たましい ちから へいあん はぢ え しん いつわり あい えいち み  
かにし、我が靈の力を平安にし、耻を得ざる信とし、偽なき愛とし、睿智を充たし、  
なんぢ いましめ まも なんぢ しんせい おんちよう ま なんぢ くに つ もの え  
爾の誠を守らしめ、爾が神聖の恩寵を益し、爾の國を嗣がしむる者となるを得せ  
たま われ か ごと こ きみつ なんぢ せいせい まも つね なんぢ おんちよう おも  
しめ給え、我は此くの如く、是の機密にて爾の成聖に護られ、常に爾の恩寵を思い、  
またおの ため せいかつ すなわちなんぢわ しゅさいおよ おんしゅ ため せいかつ もつ えいせい のぞみ  
復己が爲に生活せず、乃爾我が主宰及び恩主の爲に生活し、以て永生の望を  
いだ こ よ はな えいえん いこい か しゅく もの た こえ およ なんぢ かんばせ い  
懷き、此の世を離れて、永遠の息、彼の祝する者の絶えざる聲、及び爾が顔の言い  
つく びぜん み もの かぎ たのしみ ところ いた けだし わ かみ なんぢ  
盡されぬ美善を見る者の限りなき樂の處に至らん、蓋ハリストス我が神や、爾は  
なんぢ あい もの まこと のぞみ い つく たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ  
爾を愛する者の眞の望と言ひ盡されぬ樂なり、凡そ造を受けし者は爾を世に讃  
うた  
め歌う、「アミン」

【 第二祝文 聖大ヴァシリイの原文 】 しゅさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ  
主 宰ハリストス神、萬世の王、萬物の造成者や、  
およ われ たま ところ しょぜん かついのち ほどこ しじょう なんじ きみつ う たま なんじ  
凡そ我に賜いし所の諸善、且生命を施す至淨なる爾の機密を領けさせ給いしを爾  
かんしゃ またなんじ いの ぜん ひと あい しゅ われ なんぢ おおい した なんぢ つばさ  
に感謝す、又爾に祈る、善にして人を愛する主や、我を爾が庇の下に、爾が翼  
かげ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ とうぜん なんぢ せいたい  
の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、潔き良心を以て、當然に爾の聖體  
せいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだしなんぢ いのち かに せいせい  
聖血を領け、以て罪の赦と永生とを得るを致させ給え、蓋爾は生命の糧、成聖の  
いづみ しょぜん たま しゅ われらなんぢ ちち せいしん こうえい けん いま いつ よよ  
泉、諸善を賜う主なり、我等爾と父と聖神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、「ア  
ミン」

【 第三祝文 聖シメオン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゅ あまん おのれ み かに  
我が造成主、甘じて己の身を糧とし  
われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしよせつしんぶく  
て我に與え、火にして不當者を焚く者や、求む我を焚く母れ、乃吾が百體諸節心腹



い わ しょざい とげ や たましい きよ おもい せい すじ ほね かた ごかん あきら  
に入り、吾が諸罪の棘を焚き、霊を浄め、思を聖にし、筋と骨とを固め、五官を明か  
にし、吾が全身を、爾を畏るる畏に釘うち、常に我を庇い、我を保ち、我を霊を害  
する諸の行と言とより護り、我を浄め、我を滌い、我を飾り、我を治め、我を啓  
き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神の住所たるを顯し、凡の悪者  
凡の慾は、我聖體の入るに依りて爾の家となりし者より逃ぐるごと、火より逃ぐるが如く  
ならしめ給え、我其轉達者として、諸の聖者、諸品の神使、爾の前驅、智慧なる使徒、  
及び爾が無玷至淨の母を爾に進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の祈禱を容れて、  
爾の役者を光の子となし給え、蓋獨至善の主や、爾は我等の霊の成聖と光  
明なり、我等皆神と主宰に宜しき所の如く、日に光榮を爾に獻ず、

【 第四祝文 】 しゅ われら かみ ねがは なんぢ せいたい わ ため えいせい  
主イイススハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に永生  
となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くは此の感謝の祭は、我が爲に喜悅と壯健  
と安樂とならん、又畏る可き爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮の右に立つ  
え たま なんぢ しじょう はは しょせいじん きとう よ  
を得せしめ給え、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に依りてなり、

【 第五祝文 至聖生神女に捧ぐ 】 しせい ぢよさい しょうしんぢよ わ くら たましい ひかり  
至聖なる女宰・生神女、我が味みたる霊の光、  
わ たのみ おおい かくれが なぐさめ よろこび なんぢ われた もの なんぢ こ しじょう たいしそん  
吾が憑恃と幀幃と避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪えざる者に、爾の子の至淨の體至尊  
の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾に感謝す、猶祈る、眞の光を生みし者や、  
わ こころ れいもく あきらか ふし いづみ う もの われつみ こころ もの い たま  
吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺されたる者を生かし給え、  
じれん かみ じあい はは われ あわれ わ こころ しょうかん ひつう わ おもい けんそん わ とりこ  
慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、吾が思に謙遜、吾が虜  
となりし意念に呼還を賜い、我に呼吸の絶えんとするに至るまで、罪を獲ずして、至淨なる  
きみつ せいせい う たましい からだ いやし う いた ならび われ つうかい うけとめ なみだ  
機密の成聖を受けて、霊と體との醫を得るを致し、並に我に痛悔と承認との涙  
あた しょうがいなんぢ かしょうさんえい たま けだしなんぢ よよ さんび こうえい み こうむ  
を與えて、生涯爾を歌頌讚榮せしめ給え、蓋爾は世々に讚美と光榮とを満ち被  
る、「アミン」